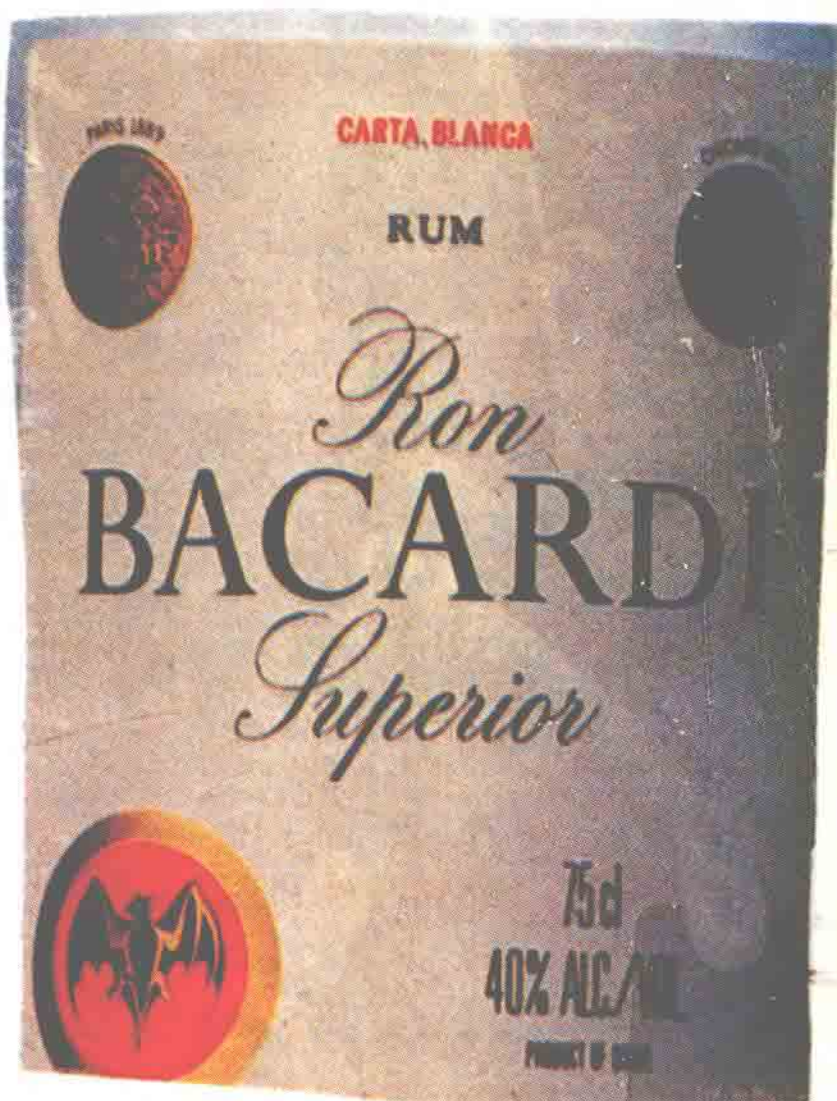


彼と彼女

森瑤子



角川文庫

かれ かのじよ
彼と彼女

もり ようこ
森 瑤子



角川文庫 677I

昭和六十二年六月二十五日 初版発行
昭和六十二年九月三十日 四版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話 編集部(〇三)二三八―八四五―
営業部(〇三)二三八―八五二―

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——厚徳社 製本所——大谷製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

彼と彼女

森 瑤子



角川文庫 677I

目次

ふたり

優しい別れ

星と夜光虫と雪とバラと

欠^{あく}伸^び

ブランチ

いつもの日曜日

カフェバー

誤解

バーミラーの女と男

ポール

*

シルキーな女

年上の女

七 七 七 五 四 三 二 一 三 六 三 七

お楽しみはこれから

カマボコとカマス

カーペットの情事

煙たばこ草

バード・ウォッチング

誘惑

強がり

白いドレスの女

カラオケ

夢物語

弦楽四重奏

駈かけ落ち

*

夫婦の風景

あつ

一三四

だめ？

一四四

声

一六六

食事友だち

一九〇

11:25 p.m.

二二

壁の月

二三三

初出誌一覧

二六五

モリ・ヨーコのイジメ

木村 晋介 二六七

ふたり

二人は同じ部屋の中にいる。女と男とは。

もう久しく以前に、女は、一緒に暮らしている男のためにことさらに美しく自分を装うことをやめてしまっていたし、男の方も、たとえば朝の食卓で朝刊から眼めを上げることではない。

会話が全く交わされないわけではないが、その際二人はお互いの顔ではなく、その背後の空間をみつめて話をする。ずっと前、まだ二人がお互いを熱烈に欲望しあっていた時、男は感動をもってよくこんなふうに言ったものだった。——きみの瞳ひとみをみつめるだけでも、ぼくは絶頂感が得られる。きみの軀からだに指一本触れずともだよ——

しかしそうした時期は人生の中うちにおいては一瞬のことではなくなり、流れる刻ときが二人の欲望をすり減らしてしまうのだ。二人は次第に声高こゑだかに荒々しく話すようになり、口論が絶えなくなっていた。関係が日毎に下り坂を転がり落ちていくようになる過程では、男の暴力や凶暴さや痛みをたたえた怒りで燃え上がる眼の色をみることに、女にとって最後の陰惨な楽しみとなっ

た。そうしたことは束の間、偽りの親密さを二人にもたらした。憎しみと区別のつかない愛。その混乱の中で繰りひろげられる性愛——半ば犯されて——。

それから二人は石のように沈黙する。以来、お互いの感情を柔らげあわないことによって、二人はお互いをひそかに見捨てたのだった。それでも彼らは一緒にいる。女と男とは。

今宵外は雨だ。暗い窓ガラスに、幾筋もの水滴が斜めに走り下りる。冷い冬の雨。そして相変わらず、二人。女は自分の年齢を思う。理由もなく自分の年齢について考えることが、このところよくある。女は三十五歳。

夜を塗りこめた濡れた窓から女は視線を男にふと戻す。数年間の怠惰な生活にもかかわらず、彼は躰のどこにも余分の脂肪をつけてはいない。別の場所で、別の女が見れば、彼は今でもふるいつきたくなるほどいい男なのに違いない。

男が膝の上に開けた雑誌の頁をはらりとめくった。

「何を読んでいるの？」答えを要求しない訊き方で女が質問する。

「別に……」男は雑誌の上に視線を落としたままものうげに答える。

「それにしても熱心に読みふけていたわ」と女はマニキュアの剥げた爪を噛む。

「世の中には色々な人間がいると思ってさ」男は女をチラと見る。

「それより映画にでも行くかい」

「今から？」

「六本木のシネマテンなら間にあうよ」

「何やってるの？」

「さあね。行ってみればわかるさ」

「じゃ行かないわ」

男は肩をすくめて口をつぐむ。時々繰りかえされる同じパターン。

「世の中には色々な人間がいるって、どういう意味？」女はつい今しがたの男の言葉を思いだして言う。

「言葉通りだよ。色々な発想をする面白そうな人がいるってことさ」男は再び雑誌に視線を落とす。「それより何か飲むかい？」

「ええ、そうね」

「何を飲む？」

「何でもいいわ」女は投げ槍^{やり}に言う。

「またしてもだ」と男は急に苛立ち^{いらだ}をつのらせる。「何でもいいわ。どこでもいいわ。どうでもいいわ。自分の意見ってものがまるきりないんだからな。それに比べると——」

「それに比べると？」女の瞳^{ひとみ}が暗く光る。

「いいよ、別に。何でもない」

「言つてよ。何か言いかけたでしょう」

「言つたつてしようがないさ。それで何かが変わるわけじゃないし」

「言つてみなければわからないわ。何なのよ？」

「たとえばの話さ。こんな女も世の中にいるつてこと」男は雑誌の求む交際欄の一点を指して、ある種の残酷な喜びをもつて読み始める。「——ボジョレを一本だけ持つて、夕陽ゆうひを見に行かない？ 香港ホンコンのリパルス湾ベイとかマンダレーの夕陽といきたいところだけど、冬の湘南しょうなんあたりで妥協するとして。数時間だけ、人生から逃避かたしたい男性、私にご連絡下さい。私書箱二九四——」

「それがどうしたの？ 死ぬほど退屈している女の戯言たわごとだわ」女は奇妙な表情で、だが静かに言う。

「たとえそうでも」と男は言う。「自分の好みや意見をちゃんと持っている女だよ」

「まだ何か言い足りないそうね」

「同じ女でも発想が違うものだと思ってさ」男は皮肉な眼めで女を眺める。「マンダレーの夕陽のこととかさ、きみなぞ逆立ちをしたつて思いつかんだらう」

「あなたがマンダレーの夕陽に心を動かされるとは、私には意外だわ」女はちよつと遠い眼

をする。

「いっそのことその女に逢^あつてみたら？」

「案外いい女だったりしてネ、ぼくはきみを捨てるかもしれないぜ」試すように男は言う。

「案外それで私たちの脱出口が見つかるかもね」

「ずいぶん落ち着いているんだな。きみを捨てるかもしれないとぼくは言ってるんだよ」

「その見たこともない女のために？」

「そういう素敵^{すてき}な発想をする女のためにさ」

「でも多分、あなたは私を捨てないと思うわ」

「たいした自信だな」男は顔をしかめる。「実を言うとな、ぼくはその女のために既にボジョレを一本買っているんだ」残酷な男の声。

「ブラボー」女は動じない。

「もううんざりなんだ。そこにそうしてマニキュアの剥^はげた爪^{つまめ}を噛^かんでいるきみを見ると、むかむかするんだ」

「でもその女も同じよ」女はあくまでも落ち着いている。

「え？ 何と言った？」男が訊^ききとがめる。

「きっと普段は剥^はげたマニキュアをしているってことよ」

「そんなこと、きみにどうしてわかる？」

「どうしてわかるか、ほんとうに知りたいの？」女は奇妙にも輝くような表情で男をみつめる。

「そのわけはね」と彼女は囁くように言った。

「その交際欄の女、実は私なのよ。私が書いて広告を出したの」

少しして、二人はボジョレをあけている。

「まいったね」と男は苦笑して、女とグラスを合わせる。「実際まいったよ」

それから二人は、ワインを静かに飲み始める。視線はお互いの顔ではなく、やはりそれぞれの背後の空間に注がれている。

優しい別れ

ヨットクラブの中は、週末のクルージングから戻った男たちでごったがえしている。海の男たちの顔は冬の相模湾^{さがみわん}に吹く寒風のせいで、どれも少し荒^{すさ}んでいる。その中にあのひとの顔は見当たらない。誰^{だれ}よりも荒んで見えるあのひとの顔は。

室内にはエンジンオイルや海や風やコーヒーの香りが充満している。それとウィンドブレーカーの下のアラン模様のセーターが放つ、羊毛の脂^にじみた匂^{にお}いも。

ここは男の世界だ。男たちの匂いに満ちている。しかし私の男はまだ海から戻らない。

クラブの一隅では、半年前にスエーデンをヨットで出た海の冒険者が二人——男と女が——カナダに向かう途中二日前から寄港しており、週刊誌のインタビューを受けている。男の名はヤン。女はインガ。

——いいえ、私たちは夫婦じゃありません。インガが微笑する。この指輪のこと？ これはわたしの夫がくれたものです。ええ、子供が二人います。

ということはかけ落ちですね、と週刊誌の記者が念を押す。ご主人やお子さんを捨てて海へ

逃避行というわけですね。

——そうおとりになりたければ……。ヤンを愛してましたから。

二人はそこでしたっかりと手を握りあう。その時ハーバーに面したドアが勢いよく押され、冷たい風を先行させながら海の男たちが傾れこんでくる。男たちはあたりに新鮮な潮の匂いを放ちながら、舌の焼けるような熱いコーヒーめざして、クラブハウスの中を突っ切って行く。その中に私の男がいる。しんがりに。潮と太陽と風とに荒らされた横顔が私の前を通り過ぎる。

——タヒチには二週間錨を下ろしたわ。インガが喋る。インガだけがもっぱら質問に答える。その横顔をヤンがそれ以上は望めないやさしいまなざしでみつめている。

——タヒチは今でもまだ楽園よ。ココナッツとバナナと魚さえ食べていれば、一生ただで暮らせるわ。

ではなぜその楽園で一生暮らさないのですか？ 記者が訊く。

——ココナッツとバナナと魚に飽きたからよ。そして人々が笑う。

私はあのひとをみつめる。あのひとだけを。すると、誰かにみつめられている時に覚える微かな胸騒ぎで、彼の視線がクラブハウスの中をさまよう。そして私を発見する。私は微笑する。けれども彼は笑わない。潮風に痛めつけられた顔に、さらに荒んだ感じを滲ませてゆつくりとこちらに向かって歩きます。私は惨めな気持ちで自分の顔の上の微笑をひっこめる。

——ヨットで航海していて、一番怖ろしいのは風よ。インガの声が続く。

「一体きみはここで何をしているんだ？」押し殺した冷い声。「どういうつもりなんだ？」

「歓迎されるとは思わなかったけど」と私は男の顔の上に愛情の片鱗でも残っていないかと必死に探す。だがそんなものは——。

「わかっているだろう。ここは僕の領域なんだ。ここにいる連中は僕の仲間でもあるが妻の友だちでもある。妻を裏切ってはいるが、僕は最低のルールを重んじる人間だ。彼女のテリトリーの中で、妻の面目を潰すのはしのびないね」

「面目のことを言うのね。それならお互いさまよ」私の体はなぜかドロテビスの黒い特大のセーターの中で泳ぐように揺れる。「男の心が離れていくのを知っていて、それでも男を追いつく女は女の面目のことも、少しは考えてくれた？」

——ただの風じゃないの。壁のような風。いったん海上にその風が起ると、何日も吹き続けるわ。想像を絶する風なのよ。それは怖ろしい吠え声で悲鳴を上げるの、風が。わたしはキャビンにたてこもって耳を塞ぐ。それでもまだ聞こえるの。身の毛のよだつような風の叫びが。そういう時わたしは床を転げ回るわ。そしていつのまにかわたしも絶叫している。あの風が吹くと、いつも発狂するのよ。インガはそう言ってヤンの厚い胸に顔を埋める。ヤンの手が彼女の髪を静かに愛撫するように、動く。いつまでもその手は動き続ける。